

随 想

ヒマラヤに抱かれた信仰の国ネパールを旅する

佐々木 教祐

昨年11月末に世界の屋根と呼ばれるヒマラヤの山々に抱かれヒンドゥ教と仏教が仲良く共存する国ネパール（ネパール連邦民主共和国）を訪ねた。雪をいただいたヒマラヤの麓にあるので寒いと思われがちだが、最高気温が冬で20℃、夏でも30℃と穏やかで、6～8月が雨期、9～5月が乾期となる。10～11月はそれほど寒くなく空気が澄み渡りヒマラヤの山々がくっきり見えるベストシーズンで、ネパールに向かう飛行機はほぼ満席状態になる。食事も香辛料がそれほど強くなく、美味しく食べられた。2008年5月に相次ぐ王族の不祥事から王制が廃止された混乱でデモなどが続いたが、落ち着きを取り戻しつつあった。少し前までは、デモで立ち往生したとの報告もあったが、滞在中は1度だけダルバール広場で集会に出会ったが、観光には支障がなかった。ネパールは動物天国で、野良犬や神様の使いの野良牛がのんびりと歩いている間を、人間たちが車で走りまわっている奇妙な国である。

中部国際空港からタイ航空を利用してバンコクで1泊、カトマンズに12時50分に到着した。時差は日本より3時間15分遅れとなる。まずバスで観光地バクタプルに向かう。カトマンズ盆地には15～18世紀に君臨した3王朝（カトマンズ/パタン/バクタプル）の遺跡があり、その一つがバクタプルである。見どころはダルバール広場で、ダルバールはネパール語で「宮廷」を意味する言葉で、3つの旧王国にはそれぞれダルバール広場があり、それぞれの王が美を競いあって造りあげた広場だけあって、どのダルバール広場も見事な装飾が施された宮殿や寺院が立ち並んでいる。バクタプルはカトマンズの東15km、遠くにヒマラヤが白く光る丘の上、赤茶のレンガ造りの建物がびっしり並ぶ古い町だ。狭い道をオートバイや車が人をかき分け走ってゆく。ここの文化を作り上げたネワールとよばれる人々は手先が器用で、ここの広場の建物に見られる繊細な木彫の窓は美しく、ネワール建築の傑作である。映画「リトル・ブッダ」の出家前のシッダールタ王子が過ごした都の様子はここバクタプルとパタンで撮影されたという。ネパールのヒンドゥ教寺院は教徒以外寺院の中に入れていないとのことであるが、チベット仏教の寺院は、いつでも中に入れてもらえた。トウマ

ディー広場でひととき目立つのが 18 世紀初めに建てられはニヤタポラ寺院で、高さ 30m の五重塔を持ち、カトマンズ盆地にある寺院の中で最も高いという。ニヤタポラ寺院から石畳を 10 分ほど歩くと、タチュパル広場に出る。この辺りはマッラ王朝以前から残る古い街並みで、広場中央のダッタトラヤ寺院は 1427 年建立で、ご本尊はヴィシュヌ神でその神様の乗り物であるガルーダが向かいの石塔の上に控えている。見学を終えてヒマラヤのよく見える標高 2100m のナガルコットへ狭い山道をバスで進む。道の脇に桜がひっそりと咲いていたり、段々畑に菜の花が咲いていたり、竹藪にはタケノコが見られ、日本の春の風景がそこにはあった。ナガルコットの展望台では、沈む夕日に赤く染まるヒマラヤの雄大な山々のパノラマを楽しんだが、日が落ちると少々寒くなった。ホテルに着き歓迎のティカを額に付けてもらった。ネパールでは電気不足のため毎日 2 時間程度の停電が予告されており、首都のカトマンズも例外ではない。その停電は夕方に起きるが、ホテルなどは自家発電の装置を持っているので、一瞬暗くなる程度だが、一般家庭では本当に停電するらしい。夜中などに停電することもあるので、懐中電灯はネパールでは必需品である。もちろんホテルには各部屋にローソクとマッチの用意がされていた。

3 日目の朝、山の上に立つホテルの部屋からヒマラヤの日の出を見た後、明けゆく山々を見ながらゆっくり朝食を取り、昨日来た道をもどり旧王国のひとつパタンに向かう。パタンはカトマンズの南、聖河バグマティの川向うに位置する古都。カトマンズ盆地にマッラの 3 王国があった時代に首都として栄えた。ダルバール広場の王宮をはじめとする見事な建築物に、その名残を見ることができる。長い仏教の歴史を持ち、町の外側には紀元前 3 世紀にアショーカ王が建てたとされるストゥーパが残っている。今でも住民の 8 割が仏教徒とのことである。この町はサンスクリット語で「ラリトプル」と呼ばれ「美しい都」の意味である。この街に暮らすのはネワール族でカトマンズ盆地に紀元前から住んでおり、彫刻、絵画などの芸術に優れており工芸の町として知られている。町には仏像や木彫、タンカ（チベット仏教に基づく仏教絵画）を描く職人の工房を見かける。パタンには民家の窓に繊細な彫刻、小さな祠など町の人々の生活が見られた。ここの建物は 17～18 世紀につくられたもので東側には旧王宮、西側にはいくつもの寺院が並びネパール建築を見ることができた。寺院の中でも 17 世紀につくられた石造りのクリシュナ寺院がひととき目をひく。2 階にはクリシュナ、3 階にはシヴァ、4 階にはブッダが祀られており、寺院の前にはクリシュナの化身であるヴィシュヌの乗り物であるガルーダの像が建っていた。通称ゴールデン temple は本堂が金箔で覆われ、仏像も金色に輝いていた。こ

の寺院は、ネワール族の僧院で、マンダラや仏像、経典などが収められているとのことだ。五重塔をもつクンベシュワール寺院は14世紀にたてられたシヴァ神を祀る寺院だ。

午後は飛行機で30分ほど西に飛びポカラに着く。ポカラはカトマンズから西へ200km、海拔800mの温暖な気候と、ペワ湖に映る周囲の山々の景勝に魅せられて、古くからヨーロッパの人々が保養地として訪れ、白いヒマラヤが間近に見られる、ネパールを代表する景勝地である。ポカラ盆地からはポカラのシンボルともいえるマチャプチャレ(6993m)をはじめとして、アンナプルナ南峰(7219m)、ダウラギリ(8167m)などが美しいペワ湖に影を落としていた。またポカラの町は昔、チベット・インドの交易中継地として栄えた。飛行場からバスでペワ湖に行き、4～5人乗りの小さなボートに乗って夕日に赤く染まるヒマラヤの山々を楽しんだ。ペワ湖からはアンナプルナ連峰がくっきり見え、マチャプチャレは「魚の尾」の意味で頂は魚の尾のような峰が赤く輝く。「ヒマラヤ」の語源ヒマールとは、サンスクリット語で「雪の住居」のことだとガイドさんの説明があった。

4日目は、まだ薄暗い5時30分に朝食の弁当を持ってホテルを出発した。日の出の時刻に、途中の村の小高い丘で朝日に輝くヒマラヤを見る。朝日がまず頂を赤く染め、徐々に山全体を包んでいく雄大な様子を写真に撮りながら1時間ほど眺めてから、さらにバスでチャンドラコットへのハイキングの出発地の村まで進む。その村からなだらかな山道を歩いて1時間ほどで展望台に着く。村人たちの生活道路なので歩き易いし、眼下には美しい段々畑も見え、ガイドさんと話をしながら歩いて展望台に着く。雪を被ったヒマラヤの山々に囲まれて、弁当の朝食を食べながら添乗員さん差し入れの熱いインスタントみそ汁を飲んで至福のひと時を味わった。下りの途中で学校に行く高校生に会った。ネパールの小一中一高の修業年数は、5・3・2の10年で国際水準の12年と比べると短い。10年を修了するとSLC(School Leaving Certificate:中等教育修了資格)試験の受験資格が与えられ、このSLC試験は、高校卒業認定試験と大学(カレッジ)入学試験を兼ねている。大きな町では私立学校もあり、教育熱心な家庭の子供は学費のかかる私学に通わせているようだ。私たちが村で出会った学生が通っている学校は、国立とのことであった。夕方、サランコットの丘に夕日を見に行く。サランコットは標高1592mの丘で、アンナプルナ連峰、マチャプチャレが目の前に遠望でき、夕日の光が山を赤く染めてゆき、また薄くなっていく様子を堪能できた。

5日目の朝、ポカラからカトマンズに戻ると同じ飛行機で予約してあったエ

ベレスト遊覧飛行へと出発した。3列の座席の真ん中は使わず、窓側20座席が指定席であった。カトマンズから東に飛び、エベレストの少し東まで行き、旋回して戻るコースである。飛行中に操縦席に一人ずつ入れてくれ、写真を撮らせてくれた。エベレストは周りの山よりも少し頭を出し黒い岩肌を見せていた。斜面が急で雪が岩肌に積もらないらしい。飛行機から見える8000m級の山々は壮大で1時間のフライトもあっという間に終わってしまった。雲にさえぎられずエベレストの山々を見られたのは非常に幸運であった。帰ってからカトマンズの東7kmに位置する、ネパール最大のストゥーパのあるボダナートを見に行く。かつてカトマンズとチベットのラサを結ぶヒマラヤ越えの交易が盛んだった頃、チベットからの商人や巡礼者は必ずここに立ち寄って無事にヒマラヤ越えができたことを感謝し、帰路には再び旅の安全を祈ったという。ネパール最大のストゥーパはそれ自体が曼荼羅の構造で、4層の台座は地、半円級のドームは水、四方を見据える目が描かれた部分と13層の尖塔は火、その上の円形の傘は風、先端の小尖塔は空という、宇宙を構成する5大エネルギーを象徴しているという。また、ストゥーパはブッダの悟りと仏教の本質を、台座は瞑想、ドームはすべての煩惱から解放された無の境地、目の描かれた塔は涅槃にいたるまでの13の階段として表現しているとも言われている。午後はカトマンズの市内観光で、小高い丘の上にブッダの目が描かれたストゥーパが建ち、市内が一望でき、サルいっぱいいるスワヤンブナートを見て、つぎにカトマンズ王国の中心のダルバール広場に行く。広場の北側のシヴァ・パールヴァティー寺院は18世紀にゴルカ王朝が建てたものである。広場の南側には、1本の大木から造られたといわれるカスタマンダプ寺院がある。ネパール最古の建築物といわれる寺で本来は巡礼宿だったものである。ダルバール広場を北に歩くと、旧王宮の入り口前の広場に出る。銃剣を持った衛兵の立つ狭い入口のわきには赤い布がかぶせられた孫悟空のモデルになった猿神ハヌマンの像がある。ここがハヌマン門 Hanuman Dhoka だが、旧王宮とその付近もハヌマンドカと呼ばれている。ダルバール広場の南側に小さい窓枠の木彫が見事な建物がある。ここは女神クマリの化身として崇拝されている少女が住む館があり、若い女の娘がちょっと顔を出してくれた。

次の日はカトマンズからバンコクを経由して中部国際空港に帰り着いた。

(名古屋大学名誉教授)